

鬼瓦に福の神 これって何?

あちこちの民家にえびす様や大黒様

但馬地域ではよく、民家の鬼瓦に小さなえびす様や大黒様の顔が据え付けられている。あなたの家の周りでも、少し探せば、福々しい笑顔がいくつも見つかるはずだ。しかし私の記憶では、これまで暮らした神戸・姫路・相生などの瀬戸内側でお目に掛か

った覚えがない。これって、但馬独特の願掛けか何か? 今日はそんな「福の神」にちなんだ、縁起の良い話題を一つー。
(長谷部宗)

神戸や姫路などでは見られず

鬼瓦のえびす・大黒を知ったのは、朝来市和田山町竹田の古い町並みを散策していた時。ある民家の、屋根と屋根とのつなぎ「隅棟」の先に、



雪に強く、丈夫な石州瓦の特徴

豪雪地帯の但馬で高い需要

但馬地域の家々を守るえびすや大黒。えびすは烏帽子(えびす)、大黒は頭巾だ

大黒の装飾が施されているのを見つけた。「あら、おしゃべり」と目ぼれた。見たところ大きさは10坪足らず。顔の形はさまざまだ。



素焼きや白色が多いが、屋根瓦に合わせた黒色などもあった。今まで気にも留めなかったが、注意してまちを歩くと、あの家にもこの家にも。たくさん破顔が輝いている。竹田だけでなく、自宅の神戸新聞朝来支局や但馬総局(豊岡市)周辺でも、いるわ、いるわ。見つけるたびにちよっぴり福を授かった気になり、いつしか私は民家の屋根ばかり観察する「えびす・大黒ウオッチャー」となっていた。

そんなある日、但馬1周ドライブを取行。件のえびす・大黒の分布地域を調べるためだ。そして約5時間のドライブの結果、えびす・大黒は但馬全域に広がっているという結論に達した。「出現率」は、ある程度築年数を経た、重厚な造りの和風住宅が高い。若い世代が好みそうな新しい物件ではほとんど見られない。南方にも足を延ばし但馬の南端・生野峠を越え、神河町に入ると、めっきり目にする回数が増えた。

一体、これは何? 朝来市教委文化財課に聞くと「いやあ、ちょっと分かりません…。建築関係なので、工務店やヘリテージシマネジャーの方が詳しいかも」。そこで、同市和田山町柳原の田中

工務店や、建築士でヘリテージシマネジャーの松本智翔さん(43)に同町竹田に尋ねると、同じ答えが返ってきた。「この辺りは石州瓦が多いからじゃないですか?」



石州瓦。生産地は島根県西部で、全国2位の生産量を誇る。全国シェアは約15%。淡路瓦(淡路島)、三州瓦(愛知)と共に「日本三大瓦」に数えられる。他産地の瓦よりも高温の1200度以上で焼成するため、凍害や塩害に強く、耐久性にも優れる。兵庫県瓦工業協同組合によると、県南部の住宅に使われるのは、大半が三州瓦や淡路瓦だが、豪雪地帯の但馬では、雪に強く、丈夫な石州瓦が圧倒的に多いという。どうもえびす・大黒の装飾は、こ



但馬の景観を特徴付ける石州瓦。養父市八鹿町八鹿

の石州瓦の特徴らしい。インターネットで調べた「石州瓦工業組合」(島根県津江市)に早速、電話をかけた。対応してくれたのは、専務理事の佐々木啓隆さん(66)。聞けば、島根県はえびす・大黒と縁が深いという。出雲大社(同県出雲市)の祭神は、神話「因幡の白兔」でも知られる大国主神(大黒)。

松江市の美保神社は事代主神(えびす)を祭り、西方参ることを「両参り」と呼ぶそう。昔から石州瓦では商売繁盛や人々の幸せを願い、棟端飾瓦(鬼瓦)にえびす・大黒の焼き物を据え置くと、この

佐々木さんによると、この焼き物の型は、鬼瓦職人「鬼師」が手がける。えびすや大黒以外にも、打ち出の小づちやその家の家紋を飾るケースも多いらしい。

そういえば昨年、観光で世界遺産の石見銀山(同県大田市)に行ったな、と思い出し、その時撮った写真を見返してみた。同市も石州瓦の産地。銀山の景観を彩る赤瓦はもちろん、石州瓦だ。屋根が写る画像を拡大すると、いたいた、鬼瓦のえびす・大黒が。では但馬では、いつ、どのよう

に。 続編は25日掲載予定です。



2018(H30).4.25
神戸新聞

21日付の「但馬のギモン」で、但馬の民家の鬼瓦にえびす・大黒の装飾が多いのは、凍害に強い石州瓦（島根県）が普及しているためだと紹介した。続く今回のギモンは、「石州瓦がどのように但馬に広まったか」だ。

石州瓦どう広まった？

鬼瓦に「えびす・大黒」の謎 続編



●瓦を見上げる橋田信義さん、澄子さん夫妻＝養父市八鹿町八鹿
●但馬に残る昔の石州瓦。所有者によると、100年以上前に北前船で持ち込まれたと伝わるという＝豊岡市竹野町竹野

ざいます…。優しくほほ笑む信義さんが大黒さまのよゝに見えた。

石州瓦には、赤褐色の「来待瓦」や黒光沢のある「鉄砂瓦」がある。約200年前、島根の「来待石」を釉薬の原料とする来待瓦が登場。約100年前に浜の砂鉄を使った釉薬が開発された。鉄砂瓦が誕生したという。但馬では鉄砂瓦の方が一般的だ。

前回取材した、石州瓦工業組合の佐々木啓隆・専務理事(66)の紹介で、昔の石州瓦の流通に詳しい高校教

北前船などで島根から

職人散らばり技術移転



諭、阿部志朗さん(52)の記録帳によると、因幡や根県浜田市Ⅱの話や、阿部さんによると、石州瓦を何度も購入してお

前回は取材した、石州瓦工業組合の佐々木啓隆・専務理事(66)の紹介で、昔の石州瓦の流通に詳しい高校教

れは石州瓦の職人による「技術移転」だ。京都、兵庫、広島、山口、福岡など西日本各地に職人が散らばり、石州瓦の製法で瓦を生産し始めた。今は途絶えた「八鹿瓦」(養父市)や「夜久野瓦」(京都府福知山市)もその系譜だという。

運で、日本海沿岸各地に広まった。江戸期の庶民は瓦をふくことはできなかったため、主に明治以降の話の別の広がりもあつたように思われる。浜田市の廻船問屋「す」と阿部さんは言う。そ

石州瓦 島根県西部の大田、江津、浜田、益田市にまたがる地域が一大産地を形成。耐火性の高い粘土と釉薬(ゆうやく)を原料とし、日本各地の瓦の中で最も高い焼き温度とされる1200度以上で焼成する。凍害や塩害に強い瓦として、日本海側の豪雪地帯でも広く利用されてきた。石州瓦工業組合によると、2017年の出荷枚数は約3920万枚。うち中国地方が5割、九州地方が4割を占める。近畿地方への出荷は全体の8%で、兵庫県は4%。鬼瓦に据えるえびす・大黒は、NHKの人気番組「ラタモリ」で2015年、島根県出雲市を取り上げた回

後日、佐々木専務理事から「御地と石州瓦の縁について」題するメールで、参考資料をたくさん送っていただいた。その中には何と、橋田信義の紹介記事があった。

記事によると、澄子さんの祖父・市太郎さんは島根を専門に手がけ、但馬地方にも盛んに出荷していたという。驚くことに、橋田さんとは公私ともに親しかったという。

で紹介された。八鹿瓦と夜久野瓦、八鹿瓦は昭和初期まで養父市八鹿町で作られた、八鹿焼の主要産品の一つ。同市教委によると、明治初期に八鹿町の庄屋宅が火災で焼失。これをきっかけに石州瓦の職人を招き、村に窯を築いて始まったとされる。釉薬は島根の来待釉を使用した。一方夜久野町史によると、夜久野瓦は大正期、島根県石見地方などから移った瓦職人が、耐久力のある釉薬瓦の生産を開始。昭和初期には年間40万〜50万枚を焼き、大半は兵庫県方面に出荷された。釉薬は鉄砂などを使用。1971年、最後の1軒の廃業を閉じた。

■ あなたの「ギモン」こちらまで ■

但馬総局では、読者が感じた疑問や、記者が日頃の取材で不思議に思ったことなどについて調べ、「但馬のギモン」コーナーで原則毎月第3土曜日に紹介しています。またそれ以外にも随時掲載しています。皆さんの「ギモン」をお寄せください。但馬総局(ファクス0796・24・3795、メールtajima@kobe-np.co.jp)